その18　ケンペル

（平成28年２月１日号－第302号）

江戸時代、長崎の出島にいたオランダ商館長は、日蘭貿易のお礼に江戸に参府しました。その随行者が、道中記を残しており、枚方についても記述しています。１６５１年にドイツで生まれたケンペルもその一人です。

ケンペルは、大学で医学と博物学を修めた後、スウェーデンのペルシャ派遣使節として各地を回っていましたが、その後も安定した地位を得るより旅をする道を選び、当時、広大な地域で貿易等を行っていたオランダ東インド会社の船医となって、１６８９年にバタビア（現在のインドネシアの首都ジャカルタ）に渡りました。

そして、元禄３年（１６９０）には、オランダ商館長アウトホールンつきの医師として長崎の出島に赴任し、元禄５年（１６９２）まで２年余り日本に滞在しました。

滞日中、ケンペルは、日本の歴史、社会、政治、宗教、動植物などを自身のスケッチも交えて柔軟な眼で総合的に記述し、これが彼の死後、日本誌として刊行され、ヨーロッパの日本観に大きな影響を及ぼしたと言われています。

また、商館長の江戸参府に２度随行した経験を江戸参府旅行日記に残し、その中には、これ（今市・守口・佐太[さた]（・出口）に続いて約５００戸の枚方の町がある。われわれは（大坂から）５里の道を進んで、午前９時半にこの町に着き、半時間休んで昼食をとった。ここには、たくさんの旅館や料理屋があり、わずかな銭で茶や酒を飲み、また、いろいろな温かい食べ物を食べることができるし、どの店にも、めかした若い女中がいると記されていて、宿場町枚方の当時の様子をうかがい知ることができます。